



町民文芸

只見短歌会

十月詠草

大塚栄一

指導

娘の遺影に残せし子等を守りくれと我が及ばざるを朝々祈る

馬場 八智

翳りゆく道を辿れば日溜りの落葉に残る温もり立てり

小倉キミ子

疑がはれし病気の検査異常なく気も晴れやかに買い物気張る

渡部ゆき子

よろめけば「にしは駄目だ」と言ふ義母は間置かず我に抱っこ促す

目黒 富子

紅葉せる大きな木の元いとしるく季節はづれの紫陽花の咲く

新国由紀子

ひ孫らの「じいちゃんガンバ」の応援に返す球にもカミなぎる

飯島小百合

老人会の人等と共に紅葉の峠越へゆく車中賑はふ

関谷登美子

母逝きしその歳越へて忙しく悔いなき日々を我は生きをり

渡部ヨリ子

桜の葉紅く色づく苑の庭初秋の雨のけぶりつつ降る

新国 洋子

(出詠順)

只見俳句会

十一月例会

目黒十一

指導

身に入むや湖底に木株白々と

礼

湖一円岩肌渇く寒さかな

一穂

新米の餅の自慢や九日祭
採るものもみな取り込んで雪起し

修一

雲行きを窺い急ぐ豆叩き
軒先や妻の干したる落花生

敦子

雪の日や野猿の群れのぞろぞろと
初雪や南天の実の艶やかに

吉児

待ちに待つボジョレヌーボ解禁日
炬達して胡座に遊ぶ初曾孫

さればとてなすこともなく秋惜しむ
枯葉踏むスニーカーの音万歩計

信

朝練のヒタヒタと行く息白し
たとえばの話をして紅葉散る

洋子

新米を詰める弁当ばんばんに
野菜取るざる山盛りに台風来

都

前山の柞まだらに冬はじめ
立冬や今日を賜わり朝のもや

恒夫

